

資料2 グループカウンセリング週間予定表（原宿カウンセリングセンター）

月	共依存のグループ（1） 共依存のグループ（2）
火	サイコドラマ(心理劇)
水	アディクションの教育プログラム 女性の物質乱用者のグループ 共依存のグループ（3） ACのグループ（1）
木	摂食障害の子をもつ母親のグループ 摂食障害本人(女性)のグループ
金	子育てをする母親のグループ ACのグループ（2）
土	
日	サイコドラマ(心理劇) 男性の依存症者のグループ

## ＜研究2＞

### 虐待に悩む親との臨床的アプローチによる支援プログラムに関する研究

#### I. 親との支援プログラムの概要

春原 由紀 土谷 明美

（武蔵野大学教授）（日本心理劇協会会長・相州病院）

#### 1. 親支援プログラムの位置づけ

集団療法に起源をもつグループアプローチは、何らかの問題をかかえ、解決を望んでいる個人が集まって形成される集団を前提としているが、その目標、対象、あるいは依って立つ理論的基盤によって、集団の構造、用いられる技法も多岐にわたり、グループアプローチも多種多様になってきているのが現状である。したがってグループプロセスにおいても、過去をさかのぼって個人の病理を確認するという過去を指向した治療・回復過程を重視する立場もあれば、いかに持てる資源を最大限に活用して問題が解決され、精神的健康を作り出していくかという未来志向をより重視する立場もある。しかし、現在ではどの立場においても、「いま・ここで・あたらしく」生起する個人の精神内界が治療的視点として重視される。

本支援プログラムにおけるグループアプローチの立場や方法は、基盤的には＜関係状況療法＞（松村 1994、土屋 2000）であるが、研究1において報告された原宿カウンセリングセンター（所長 信田さよ子）が長年の臨床実践および研究の末、開発した独自のアプローチである。以下に述べていくが、このグループアプローチの構造自体が被虐待児童の保護者への支援フォーマット的一端であると考えられることができるであろう。

#### 2. 親支援のグループアプローチの構成

##### 1) グループメンバーの構成

グループメンバーは、大きく2つの経路から参加しグループが形成されている。1つは、原宿カウンセリングセンターに自ら来談したメンバーであり、他は、都内・近県の保健所・子ども家庭支援センター・女性センター等からリ

ファーされて来談したメンバーである。

グループ参加時には、子どもとの関係において自らが感情的になり暴力的(身体的・心理的)なかわりをしてしまうことに悩んでいることが共通であるが、原宿カウンセリングセンターに自ら来談したメンバーの主訴は、子どもとの関係に悩むというよりもむしろ自らの生き辛さ(具体的には、鬱状態や夫や姑との関係など)で来談し、カウンセリングの過程で子どもとの暴力的関係あるいは子どもとの関係における否定的感情などの問題が浮かび上がって本グループへの参加に至ったケースである。

リファーされてきたケースは、各センターに様々な形で援助を求め、子どもとの関係の困難を指摘され、本研究グループへの参加を働きかけられ、それを受け入れ参加に至っているケースである。

##### 2) グループの運営

1クール10回のclosedグループである。どのメンバーも来談時に1～2回個別でインテークし、メンバーの現状および来談経緯をカウンセラーと共有すること、また、'研究グループ'であることと参加の条件などを伝え、グループ参加に関して相互に了解をするプロセスを重視している。

1クール終了時に1～2名のメンバーが入れ替わりもあるが、次の新しいクールに入る。メンバーの入れ替わりに関しては、メンバー自身からの申し出もあるが、スタッフの判断で面談し、「卒業」とするケースもある。この場合には、今後必要に応じて援助可能である旨伝えopen-endとしている。

なお、経過において、任意で協力を求めいくつかの簡単な調査を実施した。

### 3) グループの経過

グループは、6～8名の人数で構成されているが、2001年10月～2003年までの5クール（I～

V期）の参加状況および継続した参加期間は下表のとおりである。

表1 グループメンバーの参加状況

	参加者人数	参加者の移動
I期	6	クール終了時1名卒業
II期	7	クール開始時2名参加 クール終了時2名卒業
III期	7	クール開始時1名参加 クール終了時3名卒業
IV期	6	クール開始時2名参加 クール終了時1名卒業
V期	7	クール開始時2名参加
計	33	

表2 参加期間

5クール参加者	1名
4クール参加者	1名
3クール参加者	5名
2クール参加者	3名
1クール参加者	3名

### 4) スタッフの構成

1クール（10回）を通してカウンセラー1名、記録者1名が参加している。心理劇セッションの際には、心理劇のディレクター1名が参加し、カウンセラーは補助自我の役割を取って参加している。

### 3. グループアプローチの方法の特色

#### 1) バーバルセッションと心理劇セッションの交差構造とその特色

グループセッションは、活動形態の異なる2つの方法を組み合わせて展開している。1つは、語ることを中心としたバーバルセッションであり、他の1つはふるまいながら体験的に気づく特色をもつ心理劇セッションである。1クール10回のうち、7回がバーバルセッション、3回を心理劇セッションとして参加者には初めから連絡してあった。

言語を主とする方法とロールプレイングのような行為法を適宜に併用して行う療法あるいはカウンセリングはよくみられるが、本報告のように、独立したセッションとして組み合わ

せて行うグループアプローチはあまりない。それぞれの方法の特色が生かされ、しかもバーバルセッションと心理劇セッションの交差構造が螺旋をなして母親たちをエンパワーしていく効果をもつと考えられた。本報告では、バーバルセッションと心理劇セッションのそれぞれの立場からその特色と効果について述べる。

来談時のメンバーの特徴として、それぞれが育つ過程で、家族関係において安全で受容される体験を持つことが出来ず、「自分が悪いから、愛されない」との自己否定感に支配されていることをあげることができる。そして、母親役割を担おうとした時、思い通りにならない状況が成立すると、「自分が悪いからこうなる」「子どもが私を責めている」などの感じ方が成立し、それに過去から引きずっている未整理な感情が加わり、強い怒りが生起してきて子どもに向けられると考えられる。したがって、バーバルセッションでは、過去・現在相において他者から認められることの少ないメンバーに、他者との関係における情緒的肯定感が成立することを重視しながらセッションを進めていく。基本

的に、今のメンバーを全面的に肯定する。したがって日常生活の中で、出来ていることをカウンセラーが発見しながら、日常における困難を取り上げていくこととなる。しかし、子どもへの、他者への実際的なかかわりの質において、多くの課題がとらえられる。かかわりの質を課題として取り上げるには、言語的なアドバイスだけでは不十分であり、安易なアドバイスは、時に出来ない自分への否定感につながる危険性もある。それに対し、心理劇では、様々な状況を場面化し、実際にやってみてできる・関係において自己の行為の仕方に気づくという体験が成立しやすく、それが日常生活につなげてみようとの意欲を生み、関係の変容につながりやすい特色をもつ。(ex. 他者のふるまう場面を見て、「私って、家族にありがたうって言ってない。自分の親にも言われたことないけど。でも、言ってみようと思う」と発言し、次週、「言ってみたら、自分も嬉しかった」と報告。)

子どもへのかかわり方に悩む母親たちの支援は、母親たちの過去の体験から形成されてきた『物語』の書き換えという課題と同時に、子どもとの関係を担っている現実においてどうふるまうていくか、そのふるまいを自己がどう受け止めていくかという課題が並行・交差しながら展開していく。『物語』の書き換えは、バーバルセッションにおける過去から現在に至る自己認知の、否定性から肯定性への変容を縦糸に、心理劇において、今、ここで、状況体験を他者と共有し、今、ここの関係体験を語ることを横糸に、新たな自分らしさを織り成していく作業であり、それが日常的な生活状況における自己の認識・行為の仕方の変容につながっていく。

## 2) バーバルセッションの構造と運営の特色

### (1) マルティプルカウンセリング

バーバルセッションは、マルティプルカウンセリングの方法で運営される。

マルティプルカウンセリングについて松村康平は以下のように述べている。「多面相談法、あるいは多者面談法。グループカウンセリング

では、グループの一員としての来談者およびそのグループの活動が発展するようにカウンセリングが行われるところに特色があり、マルティプルカウンセリングでは、グループにおいてひとりひとりの来談者との活動が、交互に展開される。前者では来談者たちが、場所と時間を主として共有し、後者ではそれぞれを主として分有する。」(1972 児童学事典)この方法は、メンバーとカウンセラーの1対1の関係を集団状況において重ねて展開する方法である。運営のルールとして、基本的にメンバー間相互の言語的コミュニケーションを行わないことが大きな特色である。

### (2) バーバルセッションの運営

バーバルセッションの運営は次のような経過をたどる。

①メンバー各自が1週間の生活の中で感じたことや、その日話したいと思ってきたことを自由に話す。

②話されたことを中心に、メンバーの一人ずつとカウンセラーが話し合う。他のメンバーはそのやり取りを聞いている。

③その日のセッションの中で、感じたこと、気づいたことをメンバー全員が一人ずつ話す。

この方法は、以下のような効果をもつ。

①ルール性に守られる。集団の運営方法が固定されており、メンバーの取る役割が決まっていることにより、メンバーは集団に予測的に参加することが可能であり、安定しやすい構造である。

②カウンセラーとの安全な関係において自己を語るができる。自己評価が低く、他者から自己へ向けられる関心を否定的、被害的に受け止めやすいメンバーにとって、カウンセラーとの安全な関係が強められ、他者の介入から守られる中で自己を語るができる。

③他者のいる中で自己を語るができる。過去から現在にいたるまで、他者が自己を脅かすと感じられる体験を重ねてきているメンバーにとって、他者のいる中で自己を語るということは、勇気のいる行為である。この集団構造と運営において、他者がいても語るることのできる

体験と、他者という存在が自己を脅かさない体験が成立する。

④他者の話を聴く観客体験の中で気づきが成立する。他のメンバーやメンバーとカウンセラーとの会話を聞きながら、自己を振り返ったり、他者に共感したり、自分だけではないことに励まされたりといった気づきが促進される。

⑤自己のあり方を変容する。「あなたは…」という他者に向う発言はできないルールの中で、他者の発言からの気づきは「私は…感じた・思う」という他者に内接しながらも、他者に介入・支配しない自己表現に変容していく。「感じ、気づく私」を強めていくと同時に、他者を尊重し、支配・介入しないあり方を育てる特色を有する。こうしたかかわり方の学習は、子どもを思いどおりに支配しようとし、それが出来ない時に怒りの爆発につながりやすいメンバーにとって、他者と自己の境界を明確にする学習であり、重要と考える。

### 3) 心理劇の構造と運営の特色

#### (1) 心理劇の集団構造—5つの構成要素

心理劇は、演者、観客、監督、補助自我、舞台という5つの構成要素から展開される。

演者とは、グループに課題を提起する人のことを言う。グループへの参加者はどの人も課題をもって参加しているのであり、心理劇の参加者全員が演者であるということもできる。その中で、特に自分の困っていること・どうしたらいいか思いあぐねていることなどの課題を中心にして、共に考えて欲しい、自分が様々に試みてみたいという場合に、主演者の役割を取るという。演者になるとは、「私が」主役になることであり、自分の視点からあらゆる状況が説明される。たとえば、日常生活では、あたりまえのように生活を共にしている子どものことを「どういう子どもか、特徴を3つ紹介してください」と求められて、その瞬間に自分の判断で子どものことを語る。このような時、演者においてはその一瞬、自分に取り込んでいた子ども像を外在化することになる。演者は、関係状況に限りなく自分を押し広げて、自分に成立し

ている人との関係や自分自身との関係について探求することを求められる。

観客は、演じられるのを観る役割を取る。心理劇の場面に直接的に参加するわけではないが、観ることにより感じ取ることはいきい。もし、自分であったら、あのような時にはこのようにするかもしれない、とか、あのような関わりはしたことないので自分でも今度してみよう、など、客観的に観ることも、また、演じているお母さんが自分ととてもよく似ている、自分でもよく経験することである、など、感情移入的に観ることもある。観客は、場面が終わった時点で、感想を求められる。それは、場面を共有して感じていたことを言葉にすることにより、演者との共有体験を明らかにし、また、場面状況へのかかわり方が異なることにおいて感じられることを明確にすることを目的としている。ある出来事の渦の中にいる時には気づかれなかったことを、一歩外にでて、観客的な役割を取ることで、何が起きているのか、何が問題であったのかが見出しやすくなる。一方、演者は、観客がいることで、守られながら演じることの保障を得ることが出来る。

監督は、心理劇集団の方向性を明示する役割を取る。監督は、グループのリーダーであり、主演者の課題を場面設定する演出家でもある。グループメンバーが安心して、いつもとは異なる役割をとり、いつもとは少し違う行為をしてみようとチャレンジできるように、その場の安全を参加者と共に作り出すことに関係的責任が求められる。

補助自我は、広くグループの補助者とも呼ばれる。演者がふるまいやすいように、演者に「即して」関わる。また、監督と演者の橋渡しをしたり、観客の代弁をしたりする役割もある。日常生活では、意識しなくともお互いがお互いの補助自我となっている。補助自我は役割としてあるのであり、特定個人についているものではない。自分をなくして、常に人の役に立つように振舞うことは補助自我とは言えない。心理劇の補助自我は、大切なことを受け流さないこと、それぞれの個人がもついまだ使われていない

力を掘り起こすのに共に力をかけてくれる役割をとる人と言ひ換えることも出来る。

舞台とは、心理劇の行われる空間を指す。舞台は、現実には起きていることと、心理劇の非現実性との境目を強調することもあるし、心理劇が現実を越える際の壁として機能することもある。「人生は心理劇である」と見る場合、自分の活動する舞台はどこにあるのか、舞台装置はうまく機能しているか、舞台を新しくするには何が必要であるのか、などを考えるきっかけとなる。

以上、5つの構成要素はグループにおいて「役割」として機能しており、関係状況の動きに連動して関係的に変化する行為のし方である。たとえば、社会的役割として、その場では「監督」の役割を担ってはいても、機能的には補助自我的な役割を担うこともある。

このグループにおいては、グループ・カウンセリングのカウンセラーが補助自我として参加している。これは心理劇の観点からみると監督的役割を固定的に担っているカウンセラーが補助自我として参加していることになり、参加者にとって、カウンセラーというイメージを変えることにつながっている。

## (2) 心理劇の運営

心理劇の進め方はおおよそ次の通りである。提出された課題の構成によって、第3段階と第4段階を同時に展開することも可能である。

**第1段階 ウォーミング・アップ**：腰掛けて話をすることから、今・ここで・新しく役割を取り、空間を活用してふるまうことへの移行段階である。日常生活では何気なく取っている役割をこの場であらためて、例えば、子どもの「お母さん」になることは緊張も伴なう。また、「現実規定性を超える」心理劇において、自発的でPlayfull（演戯性）な自分を体験することも期待される。心理劇では失敗を怖れずに、自分として試みたいこと、言ってみたいことなどを補助自我の助けもかりながら演じることが促される。これらのことが実感できるように様々なウォーム・アップ演習がある。

**第2段階** ウォーミング・アップを体験しての感想・今日のねらい：ウォーミング・アップの感想を述べる。ここでは、自分において成立した感じ・気づきで、些細と思われることも含めて新しい体験を言語化する。続いて、参加のねらい・自分にとっての現在の課題を話す。また、このグループでは、グループ・カウンセリングの中で、共通のテーマとされていたこと、あるいは、日常生活場面のことで心理劇セッションで試してみることが課題として残されていることもあり、それらが提示される。

**第3段階** 共通課題の演習：参加者から提示された課題、或いはグループカウンセリングで見出されたことに関して、演習形式で展開する。目的を明示して、全員が体験できるように運営される。

**第4段階** 個別課題の展開：第3段階をふまえて、さらに広く探求したいことについて、監督により場面設定がなされて、主演者を中心としてすすめられる。

**第5段階** 感想・ふりかえり：体験の共有がなされる。終結後、監督は何がなされたか場面展開についてまとめる。

## ＜研究2＞

### 虐待に悩む親との臨床的アプローチによる支援プログラムに関する研究

#### Ⅱ. 親支援のグループプロセスの研究

武藤 安子

（横浜国立大学教授）

#### 1. グループプロセスにおける意識の構造

##### 1) 目的

被虐待児童の保護者への支援プログラム開発のために、評価と効果的な指導につなげるための保護者のカテゴライズの作成が諸機関において活発に進められ実用化されてきている。しかし、保護者への臨床的援助に関しては、評価や援助技法についても体験的・事例的研究が重視される。そもそも臨床研究とはその活動を支える理論的枠組みを必要としながらも、臨床活動におけるプロセスの中で見いだされる現象を概念化し、それを再び活動の指針として生かしていく作業にほかならない。

ここで報告する研究1.および2.は、原宿カウンセリングセンターにおいて実践されている虐待に悩む保護者とのグループアプローチにおけるプロセスから得られる多面的なデータを数量的に分析し、保護者を取りまく関係状況や自己の構造の把握をすることを目的とする基礎研究である。今後、ここから発展して虐待に悩む親の診断的評価、治療的援助の方法の連続したフォーマットへの方向性が導き出されることが期待される。

##### 2) 方法

対象および期間について、2001年度の第1期に参加した6名を対象とし、1クール10回のうちの7回のパーバルセッションにおいて発話された内容を分析の対象とした。

手続きとして、メンバーの了解をとったうえで同席している記録者がその場で発話内容を記録した。

分析方法として、分析の対象としたのは、パーバルセッションにおいてメンバーによって

発話された全ての発話内容である。本グループアプローチの方法の特色から、カウンセラーの発話は分析の対象からはずした。

カテゴリの作成として、分析の枠組みを作成するために、意味内容を吟味して分析するためのエピソードを抜き出した。この際、なるべく多くのエピソードが収集できるよう細かく抜き出すよう心がけた。収集されたエピソードは、セッションの第1回262、第2回377、第4回317、第5回242、第6回286、第9回170、第10回258の計1912であった。これらのエピソードをKJ法を用いて計115カテゴリに分類した上で、出現回数の少ないカテゴリを見直す作業を繰り返し、計60カテゴリを抽出した。（表3）

##### 3) 結果と考察

###### (1) 全体の出現回数および頻度

抽出した60カテゴリについて発話内容の出現回数および出現頻度を表4に示した。当然のことながら、自分と子どもとの関係についての発話は三分の一に及ぶが、このグループカウンセリングが、人と共にいて、自分自身について語る場、現在および生育の過程における自分と家族や他との人間関係について語る場であることがうかがえる。

###### (2) 双対尺度法による意識構造

作成したカテゴリ間の関係を見るために、60（カテゴリ）×5（メンバー）の発話回数を双対尺度法により整理した。（対象となった6名のうち1名は途中参加だったため、双対尺度法の分析の対象からは除外した。残りの5名の

表3 発話エピソードの60カテゴリー

1	自分を大事にすること	31	親子関係のぎこちなさ
2	完璧でなくてもいい	32	夫から自立できない自分
3	自分の成長への気付き	33	子どもからの甘えの要求
4	過去への振り返り	34	子どもの自己主張
5	子育ての見通し	35	自分に起因すると思われる子どもの問題
6	子どもへの理解・受容	36	子どもの性質について
7	子どもとのやりとりを楽しむ	37	子どもの困った行動
8	子どもとの適度な距離がある	38	兄弟間のもめごと
9	子どもの成長への気付き	39	子どもの危険な行動
10	子どもとの適度な距離についての思い	40	子どもが夫を頼ること
11	子どもへの愛情	41	夫の精神的攻撃
12	親としての振るまいをする	42	夫とのすれちがい
13	夫との話し合いをもった	43	姑とのいさかい
14	夫への主張をした	44	対人面での居心地の悪さ
15	夫から自立している自分	45	対人的な束縛
16	姑から自立している自分	46	他者への劣等感
17	友人・他者の力を借りる	47	社会生活・近所付き合いからの束縛
18	子どもから支えられたこと	48	主婦という立場の難しさ
19	夫の支えを受けた	49	仕事に関すること
20	夫の父親としての行動	50	学校・保育園に関すること
21	何もしたくない	51	自分の過去の整理
22	好きでない自分の性格	52	愛されなかった自分
23	学びたい・変わりたい自己	53	親・兄弟からの強制
24	養育の負担	54	自分の育った環境と現在の家族
25	養育方法の不足	55	サイコドラマ
26	不適切な養育	56	グループの心地よさ
27	体罰を行ってしまう	57	グループからの気付き
28	衝動的な言動	58	グループでの緊張
29	衝動的な感情	59	Sとの関係
30	拒否的な感情	60	他のカウンセリング
		※	その他

表4 発話の内容

内容	出現回数	出現頻度
自分自身について	318	16.6
子どもとの関係	643	33.6
夫との関係	221	11.6
姑との関係	52	2.7
その他(友人など)との関係	281	14.7
家族間関係	70	3.7
成育の過程について	117	6.1
グループについて	164	8.6
その他	46	2.4
	1912	100.0

うち、欠席が1回あった者が1名いたが、全発話回数は他のメンバーと変わらないと判断し、そのまま分析を行った。)この際、メンバーによっては同じカテゴリーに属する発話を何度も繰り返すことが多かったため、対象者ごとに同一回における同一カテゴリーの発話は何回あっても1と数えることとした。結果を図1に示す。第Ⅱ軸までの寄与率は、66.1%であった。

①第Ⅰ軸は、負方向には、「子どもへの理解・受容」、「子どもの危険な行動」、「兄弟間のもめごと」、「子どもとの適度な距離についての思い」といった子どもに関するカテゴリーが布置し、原点付近に、



「学びたい・変わりたい自己」、「養育方法の不足」、「親としての振るまい」、「自分を大事にすること」といった**自分**に関するカテゴリが布置している。さらにⅠ軸の正方向には、「夫から自立できない自分」「夫との話し合い」といった**夫**に関するカテゴリが布置している。したがってこの軸は、**人間関係の担い手**について示していると考えられる。

②第Ⅱ軸については、正方向に「体罰」、「親子関係のぎこちなさ」、「子どもへの拒否的な感情」といった**密着した関係**に関するカテゴリが多く布置している。負方向には、「子どもとの適度な距離」、「自分を大事にする」、「夫から自立している」といった**適度な距離のある関係**に関する内容が多く布置している。この軸は、自分をとりまく諸関係における**関係の洞察**の構造を示した軸であると考えられる。

③この結果から、グループカウンセリングのプロセスにおける意識の構造について考察すると、図の上半分からは、「子どもからの甘えの要求」に困惑し、「子どもが夫を頼ること」にいらだち、「体罰」や「拒否的な感情」のとりこになる項目が狭い範囲に布置し、**自分と子ども、夫**の関係における「感情」と「行為」が絡み合っており、自分をとりまく密着した諸関係が整理されていない様相が読み取れる。一方、図の下半分は、**子ども、自分、夫**のカテゴリが距離をもって布置され、それぞれが独自の適度な距離を保ちながらかかわっている様相が読み取れる。

注目すべき点について、中間部の左側（第Ⅰ軸の負方向）には、「愛されなかった自分」、「自分の過去の整理」といった過去から現在につながる生育過程における個人的な課題に関するカテゴリが布置し、右側（第Ⅰ軸の正方向）には「グループからの気付き」、「グループの心地よさ」といった現在から未来につながるグループカウンセリングに参加していることに関するカテゴリが布置していることである。つまり、自分自身や子ども、夫などとの関係に分かちがたく固着している問題を見つめ、それらの関係を整理して未来に向けて生きていくためには、個人的な体験である過去相がグループ体験という現在相において受容されていく時空間の交差領域が重要な意味を持つのではないかという

ことが示唆されている。中央部には、「学びたい・変わりたい自己」「養育方法の不足」「過去への振り返り」「好きでない自分の性格」といった自己を洞察する内容が多く布置されていて、こうした深い自己洞察が契機となって、「自己の成長への気付き」へつながり、**密着した関係から適度な距離のある関係**へと向かうものとも読みとれる。最下部に位置している「子どもとのやりとり」は、それぞれが独立した人格として交流できる親子関係のあり方を示しているように思われる。

④詳細な検討は、具体的な事例に即して行われる必要があるが、「体罰」と「拒否的な感情」、「衝動的言動」と「衝動的感情」がそれぞれ対応する形で近接して布置されており、**密着した関係**の中で、拒否的な感情が衝動的な感情となり、衝動的言動が体罰につながることを意味しているのかもしれない。また、「愛されなかった自分」に近接して「子どもへの愛情」が布置されていることも、子どもに向かう愛情が自分の親との関係における感情と連動して意識されるとも受け取れる。

⑤グループに関する内容については、上から「グループでの緊張」「グループの心地よさ」「グループからの気付き」「サイコドラマ」と並んでいる。自己の洞察に関する内容に近接して「グループの心地よさ」が布置しており、自己の洞察にグループにおける活動が役立っていることをうかがわせる。また、「グループからの気付き」「サイコドラマ」は、**人間関係の担い手**を示していると思われるⅠ軸上では、友人、他者の領域に位置していることから、グループの活動が新しく活用しうる資源のように位置づけられていて、その意義を考察する上で興味深い。

#### 4) 今後の課題

今後の課題として、以下の点をあげる。まず、得られた60項目のカテゴリについて整理し、虐待に悩む保護者の意識についての類型化を試みる。さらに、それらを活用して、個々の事例研究を深めながら、グループ体験における意識の変容過程の分析を行い臨床的アプローチの効果を検討すること。



## 2. グループプロセスにおける自己像の変化

### 1) 目的

人は誰でも、「自己」と「人」と「物」とが共にかかわる関係状況を担って生きている。関係学においては、様々な体験により、自己が成長したり、人格形成がなされていく過程とは、「自己・人・物」の三者が「共にかかわり合う関係状況=接在共存状況」における自己、人および物との関係体験、関係認識、関係行為などにより、「接在共存状況」が自己において構造化していく過程であるとして多くの研究がなされてきた(松村 1983)。ひとりひとりにおける自己の構造化は、その時々で、その人がどのような自己像をもつかということをも契機に把握することも可能である。ここでは、1.の研究に続き、原宿カウンセリングセンターにおいて実践されているグループプロセスにおけるデータの分析から、グループ体験における自己像の変化を把握することを目的とする。

### 2) 方法

本研究の対象は、2002年1月から10月までの3カールの期間に、参加メンバーに、グループ開始時とグループ終了時に、TST (Twenty Statement Test=20答法) を実施した内容である。TSTは、自己のイメージを自由連想的に表現する投影的技法で、臨床実践・研究によく用いられる測定方法である。記入の仕方は、「わたしは、・・・」という文を思いつくままに20項目、記してもらおうものである。

分析対象は、各カールの開始時と終了時に両データがそろっている10名の回答である。

分析の基準枠として、関係学における「自己」「人」「もの」の関係枠を主な基準枠として用いた。

①対自己関係(「S」と記す) - 自己関係的に認知されている自己。第三者によって確認の取れない閉ざされた自己。自己の特性や行動傾向について記述されたもの。具体的には、性格、感情、容姿、健康状態、信念など。

ex:「わたしは、神経質である」「わたしは、

素直になれる」

②対人者関係(「P」と記す) - 対人関係において認知される自己。意味のある他者(家族、親戚、友人、仲間など)との関係の質、あり方において捉えられた自己。

ex:「わたしは、私の母との関係に疲れている」「わたしは、子どもが可愛い」

③対もの関係(「O」と記す) - 物象や事柄/集団との関係でとらえられた自己。社会的属性や趣味、好みによって捉えられる自己。

ex:「わたしは、女性」「わたしは、旅行が好きだ。」

また、基準枠において、自己についての記述内容が、グループ参加の前と後にどのように変容したかその方向性を検討するために、次の3つに下位分類を設けた。

aは、関係肯定的な表現であり、〈発展的〉とした。bは、関係中立的あるいは葛藤を表す表現であり、〈維持的〉とした。さらに、cは、関係否定的な表現であり〈停滞的〉とした。

### 3) 結果と考察

回答は、大学教官と大学院生の2名で個別に評定し、不一致な回答に関しては議論により判定した。メンバーのグループ開始時と終了時の回答の自己像の変化をみるため、回答をグループ参加前/後に分けて集計した。結果は、表5、表6および図2、図3に示したとおりである。

前後の変化を見るために、参加前のTSTの値を期待度数として $\chi^2$ 検定を行った。その結果、関係枠別では度数の偏りは有意でなかったが、方向性別では度数の偏りが有意であった。したがって、グループ参加前と後では、関係における方向性が有意に変化し、表6を詳しく見ると、「発展」と「維持」が増加傾向を示し、「停滞」が減少することが明らかになった。

**表5 関係枠別個数**

関係枠	前	後	
対自己関係	63	78	
対人関係	22	22	
対もの関係	77	82	
合計	162	182	P=0.14

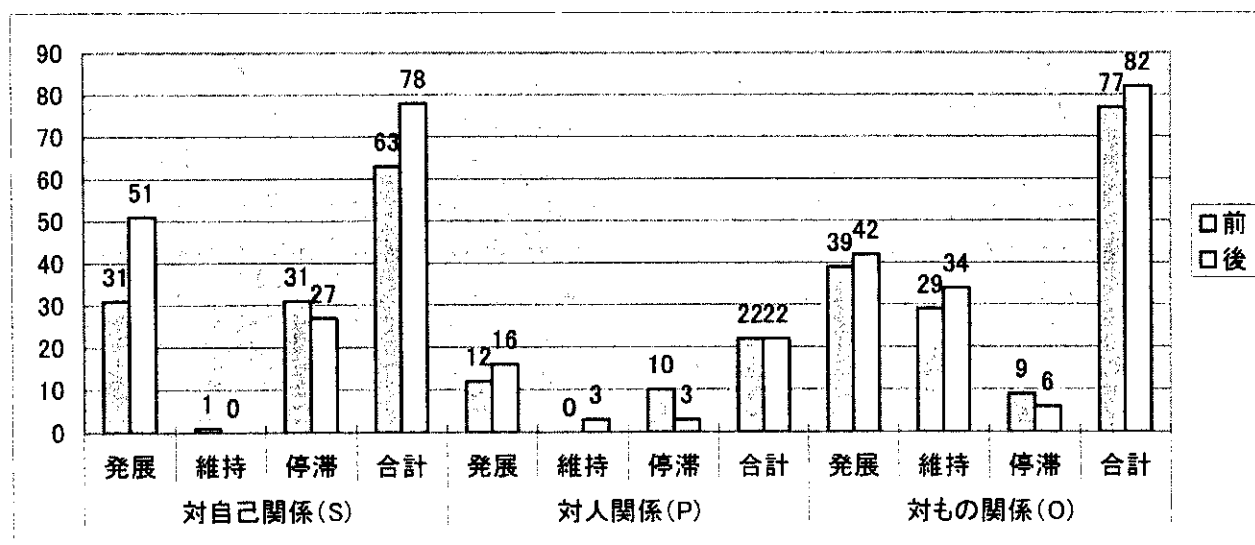
**表6 方向性別個数**

方向性	前	後	
発展	82	109	
維持	30	37	
停滞	50	36	
合計	162	182	P=0.0007

記述内容を見ると、グループ開始時には、対自己関係において「間違っただことが大キライ」「攻撃されると弱い」「治療を必要とする」といった関係停滞的な表現が見受けられたが、グループ終了時には、「明るくなった」「成長しつつある」「生きているのがなんとなく楽しみになってきた」という関係を肯定する発展的表現が増加している。また、対人関係においても、

参加前には「子どもと接するのが苦手」などの表現が見られたが、グループ終了時には、「自分の子どもが大好き」「家族が一番大事」といった発展的表現が多く見られた。対もの関係においても、開始時には、「疲れることはしたくない」「好きなことがなかなかみつからない」「母親業をちょっとしかしていない」との表現も見られたが、参加後には、「育児の方向性がわかりかけている」「仕事をするのが楽しみ」「手作りがすき」「旅行に行きたい」「たくさん本を読んで楽しみたい」「安心できる場が欲しい」といった関係肯定的な記述や願望が増えていた。

さまざまな課題をもってカウンセリングに訪れる母親は、自己構造の認知的評価が低く、その根底には、低い自尊感情 (self-esteem)、または否定的な自己像 (self-image) が横たわっていることもよく指摘される場所である。この報告では、TSTの結果からグループアプローチの効果の一端を示したに止まったが、今後さらに臨床研究を深めていきたい。



**図2 TSTによる自己像の変容 1(関係枠別個数)**

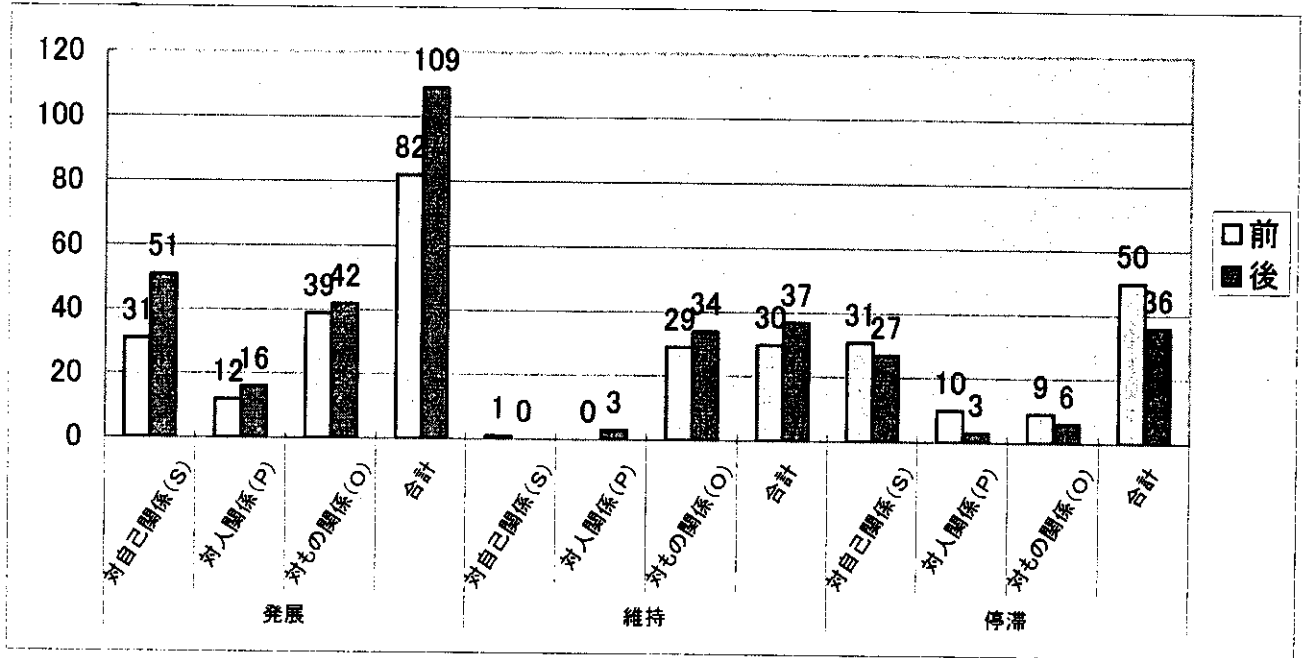


図3 TSTによる自己像の変容2(方向性別別個数)